# 野崎直治先生のご逝去を悼む

小倉欣一

早稲田大学史学会元会長・名誉教授野崎直治先生は、二〇〇九（平成二一）四月二一日悪性リンパ腫のため亡くなられました。享年八四歳。

野崎先生は、一九二四（大正一三）年八月一二日、埼玉県川口市にお生まれになり、一九五一（昭和二六）年三月早稲田大学第一文学部史学科西洋史専修をご卒業、一九五四（昭和二九）年三月大学院文学研究科史学（西洋史）専攻修士課程を修了（文学修士）し博士課程に進まれ、一九八八（昭和六三）年一一月文学博士（早稲田大学）の学位を受けられました。一九五七（昭和三二）年四月第一文学部非常勤講師となられ、専任講師、助教授を経て、一九六八（昭和四三）年四月教授に昇任され、一九九五（平成七）年三月定年によりご退職、名誉教授の称号を授与されました。その間、ゲッティンゲン大学の客員研究員として日独の学術交流に尽くされ、早稲田大学では現代政治経済研究所、社会科学研究所の研究員を兼ね、文学部・大学院文学研究科のほか、理工学部、教育学部、商学部、経済学研究科にも出講され、多くの学生を啓発し、優れた研究者を育成されました。役職としては、第一文学部西洋史専修、第二文学部西洋文化専修の主任、早稲田大学史学会の評議員、会長を務め、学外では日本歴史学協会の監事、社会経済史学会の幹事、編集委員、理事として活躍され、顧問となられました。

ご専門は中世社会経済史であり、鈴木成高教授に師事して研究の指導をうけられ、さらに小松芳喬、増田四郎、高村象平、久保正幡、堀米庸三、世良晃志郎、W・アーベル、R・ヴェンスクスという日独の卓越した教授たちの薫陶をもうけ、中世初期の農制と社会構造の研究において顕著な業績を挙げられました。少数の史料にもっぱら依拠し、「共同体」説と「領主制」説との論争が続く、一九世紀以来の文献史学の限界を、考古学、先史地理学、定住史学、地名学など、歴史補助学の新たな成果の積極的な援用により克服に努められたのです。原初村落の形成と社会構造の関係、農業技術の革新と農村人口の

変動、フランク族の征服とザクセン族の抵抗、荘園領主制の発展と農民の反乱など、主要な論題に立ち入った考察を加えられ、封建社会の成立の具体的様相を浮き彫りにされました。その本領は、北海沿岸の廃村フェダーゼン・ヴィールデの考古学的発掘の紹介のように、一般的な概観ではなく、あくまでも地域に即した綿密な検討のなかで発揮されています。これらの業績は、学位論文『ドイツ中世農村史の研究』（創文社）に纏められ、古代・中世移行期の把握を転換させたアルフォンス・ドプシュの大著『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』（創文社）の共訳とともに、わが国の学界の貴重な財産となっています。

その後ご研究は、中世中期・後期にも向かい、都市、民衆蜂起、城塞、黒死病（ペスト）、鞭打ち苦行者、ユダヤ人迫害など、近年注目されるテーマに取り組み、『ドイツ中世社会史の研究』（早稲田大学出版部）を公刊されました。一般読者のために『ヨーロッパ中世の城』（中央公論社）、『ヨーロッパ中世史』（有斐閣）を著し、ベルリンの壁崩壊の後には『ヨーロッパの反乱と革命』（山川出版社）、『概説西洋社会史』（有斐閣）を編集され、ＮＨＫ文化センター、朝日カルチャー・センターなど、市民講座においても熱心な講師として歓迎されました。このように長年にわたる研究・教育、学会運営、市民教育の功績によって、二〇〇二（平成一四）年一一月三日勲三等瑞宝章を授与されました。ご家族によると、ご退職後も「黒死病（ペスト）の社会経済史」に大きな関心を抱かれ、新たな著書の刊行を目指して、「最後の最後まで研究魂は果てることなく、執筆に励むも、未完のまま」に終わられたとのこと。人懐こい温顔が忘れがたく、学恩に深く感謝し、心からご逝去を悼み、ご冥福をお祈りいたします。